館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI－SHINAI

１９８３

館林市教育委員会

はじめに

館林市教育委員会
教育長　堀越　亘

本年度の市内遺跡発掘調査報告をおとどけいたします。

本年度は、「あかぎ国体」という大イベントが、群馬県で実施されました。この「国体」が様々なことに影響したのでしょうか、本年度は、個人宅造の数が、ぐっと減ったといえます。

本年度も又、日本のあちこちで、新発見のニュースが聞かれます。

キトラ古墳の壁画発見などは、まだ記憶に新しいことです。

全国で何千という遺跡が発掘され、破壊されて行きます。このような中で、遺跡の保存や、文化財の保護、自然保護といった問題が提起されています。これについての結論は、いっこうに出されていないような状況です。

最近、地方の時代とか、地域主義といった言葉が、さかんに叫けばれ、これとあいまって、文化的なものに目がむけられています。

私達人間は、過去の文化を受けつぎ、新しい文化を築き、未来に伝えるという使命をもっています。しかしながら、過去の遺産を破壊し、より良い生活、より便利な生活を望むのも私達人間であります。

こうした中にあって、先の問題にじっくりとりくむ必要があります。

ただ単に、古いものからくるノスタルジーや感傷だけでなく、本当に、その「物」が語る何かを受けついでいくことが必要なのでしょう。

最後に本年度の調査に、心からの理解を示していただいた地権者をはじめ、御協力下さいました皆様方に深く御礼申し上げます。

昭和５９年３月３１日

例　　言

1. 本書は、館林市内に所在する遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本発掘調査は、市内に所在する遺跡内における個人住宅建設に伴う緊急発掘調査である。
3. 調査は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次の通りである。

教 育 長　福田郁司（昭和58年11月まで）
　　堀越　亘（昭和58年12月から）
教育次長　島田勇吉
担当主管　館林市教育委員会　文化振興課　文化財保護係
課　　長　鎌田正弘（昭和58年6月まで）
　　森田　茂（昭和58年7月から）
係　　長　三田正信
社教主事　落合敏男
学 芸 員　岡屋英治（担当）
主　　事　石井洋史
調査補助員　寺内景子
調査作業員　藤坂和延・恩田英男・越谷長男・寺田国雄・葭葉嘉亮・葭葉たか・坂村昇一・坂村フジ・荻原　毅・川島考夫・星　松宏・高橋智子

4. 調査期間は、昭和58年4月～昭和59年3月である。
5. 調査に伴う経費は、国庫補助・県費補助を得て館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレース・写真撮影は、寺内・藤坂・荻原が行い、文章・編集は、三田・岡屋・寺内・藤坂が行った。
7. 本報告書中、ローム・攪乱・焼土・等にはトーンを使用した。
8. 本報告書は、岡野遺跡・笹原遺跡の調査結果をまとめたものである。
9. 調査から、報告書刊行にあたり、諸氏、諸機関に御指導・御教示・御協力いただいた感謝いたします。

本　文　目　次

はじめに …… 1

例　言 …… 2

本文目次 …… 3

図版目次 …… 4

写真目次 …… 5

第Ⅰ章　館林の環境 …… 6
　第1節　地理的環境 …… 6
　第2節　歴史的環境 …… 10

第Ⅱ章　館林の土層 …… 11

第Ⅱ章　各遺跡の内容 …… 13
　第1節　岡野遺跡 …… 13
　第2節　笹原遺跡 …… 16

第Ⅳ章　その他の発掘調査 …… 33

図　版　目　次

第 1 図　館林の現況 …… 8
第 2 図　館林の地勢 …… 9
第 3 図　遺跡土層柱状図 …… 11
第 4 図　台地及び低地のボーリング柱状図 …… 12
第 5 図　岡野遺跡周辺の遺跡 …… 14
第 6 図　遺跡現況図 …… 15
第 7 図　笹原遺跡周辺の遺跡 …… 17
第 8 図　遺跡現況図 …… 19
第 9 図　遺物分布及び調査区分全体図 …… 22
第10図　土器拓影及び実測図(1) …… 25
第11図　土器拓影及び実測図(2) …… 26
第12図　土器拓影及び実測図(3) …… 27
第13図　石器実測図(1) …… 30
第14図　石器実測図(2) …… 31

写　真　目　次

写真 1	館林地方を代表する景観	6
写真 2	洪積台地	7
写真 3	沖積低地	7
写真 4	自然堤防	7
写真 5	内陸古砂丘	7
写真 6	岡野遺跡全景	13
写真 7	笹原遺跡全景	16
写真 8	発掘風景	18
写真 9	土器 (1)	24
写真 10	土器 (2)	24
写真 11	土器 (3)	24
写真 12	石器 (1)	29
写真 13	石器 (2)	29

第Ⅰ章　館林の環境

第Ⅰ節　地理的環境

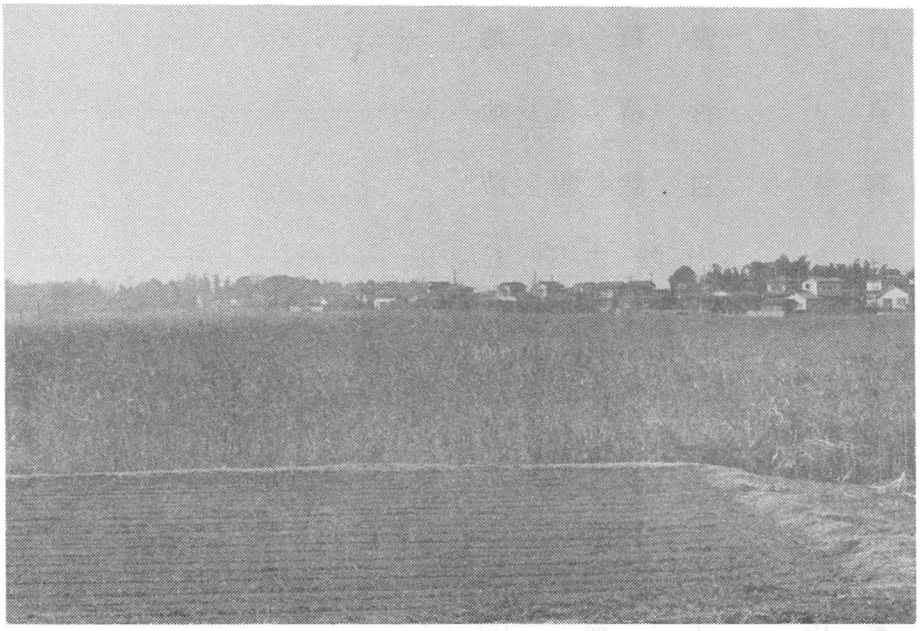


写真1　館林地方を代表する景観

館林市は、関東地方のほぼ中央部に位置する都市である。

また「鶴舞う形」の群馬県の東部「頭」の部分に位置している。群馬県でありながら、東端に位置することで、人々のつながりは、県央「前橋」より、埼玉、栃木、東京へ近いようであり、関連も深い。

館林市は、群馬県でありながら、群馬的様相をあまり示さない地域である。

北に渡良瀬川、南に利根川にはさまれた本市一帯は、標高16～33メートルと、内陸部にあっては、低い地域である。

地形は、利根・渡良瀬両大河の影響をうけて形成されたと考えられるところが大きい。

この両河川は、本市一帯の母なる河ということができ、このはんらん等における肥沃な大地は、東毛のウクライナとも呼ばれている。

地形を概観するならば、市の中央部に、千代田町古海から延びる洪積台地が存る。

この洪積台地は、現水田面　比高5～1Mの高さを持ち、東へ向ってゆるやかに傾斜している。

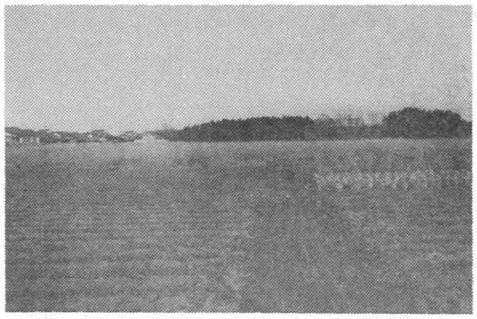


写真２　洪積台地

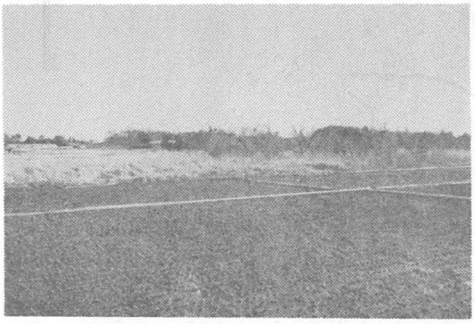


写真３　沖積低地

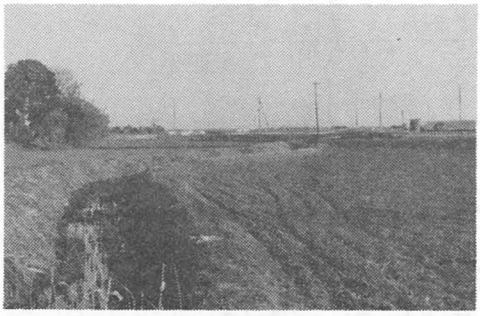


写真４　自然堤防

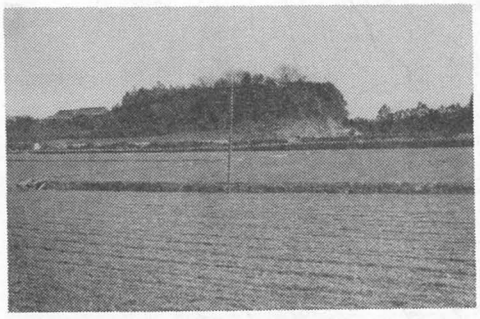


写真５　内陸古砂丘

この台地では、上部ロームと中部ロームがみとめられ、その形成は、比較的早い時期、下末吉海進時までさかのぼると考えられている。

台地をとりかこむように沖積低地が存在する。沖積低地は、台地の北側が渡良瀬川、南が、利根川によって形成されたものと考えられる。

前述の台地は、この沖積地中に、ぽっかりと浮んだように見える。

沖積地中には、至るところで、旧河道、自然堤防が観察される。

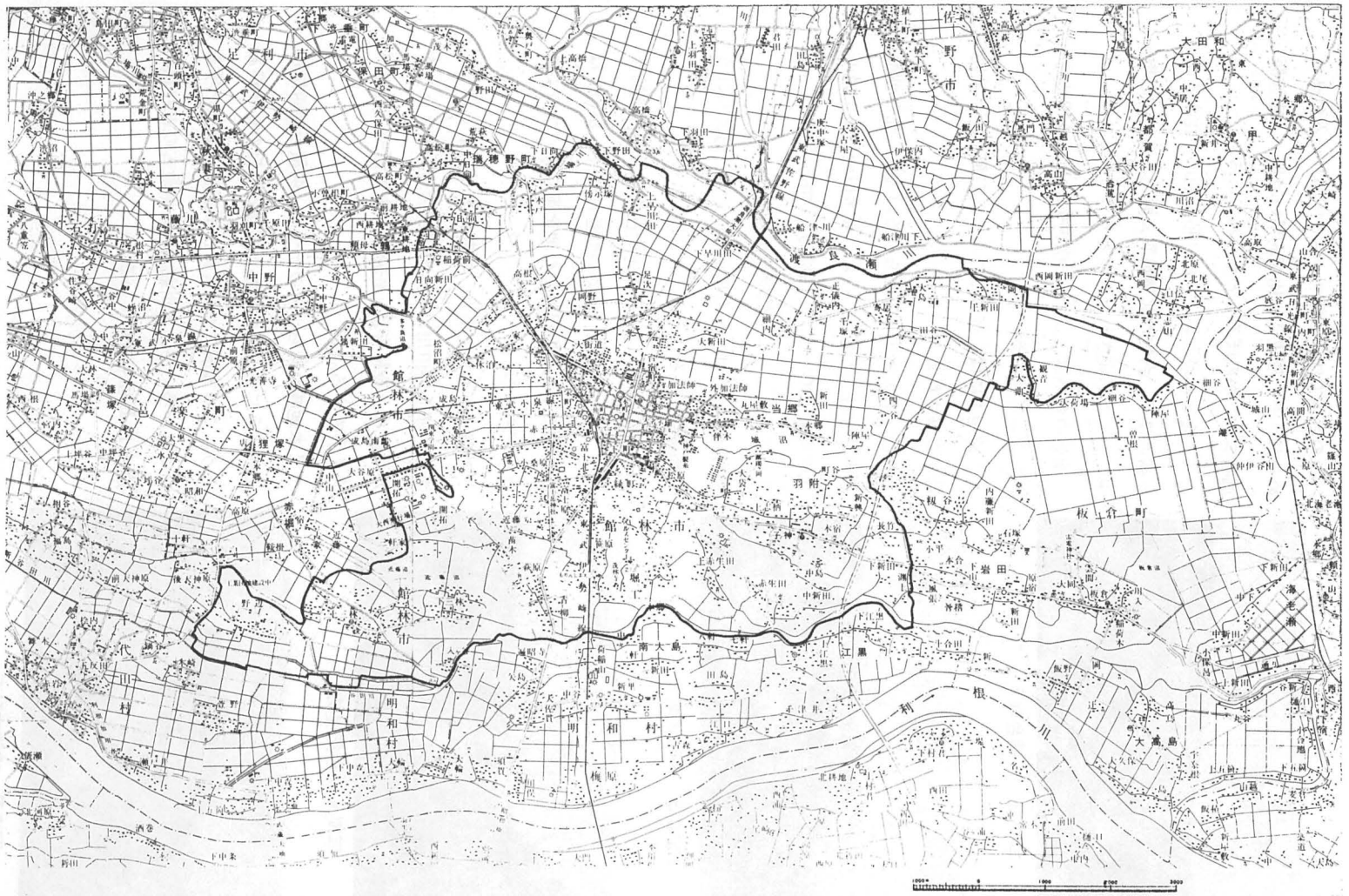
特に、旧矢場川と考えられる河道は、此の沖積地中にだ行して観さつされ、現水田面から１ｍの比高をもっている。川幅は約 10 ｍ前後である。これにそうように自然堤防が残されている。

台地南側には、谷田川が形成したと考えられる自然堤防が存在する。

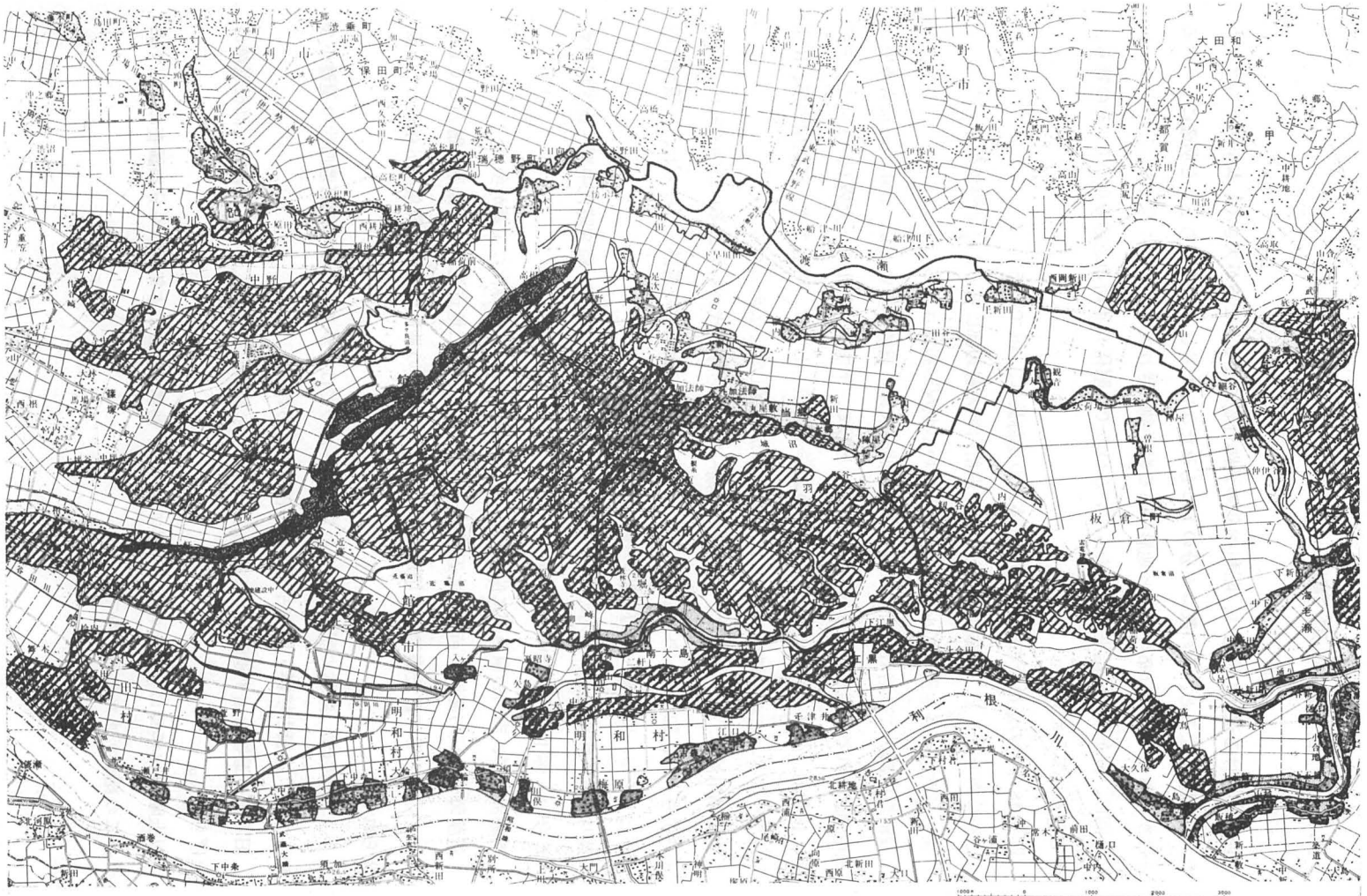
しかしながら、この両中小河川は、自然堤防を作り上げるほどの水量・流速はなく、かつては渡良瀬川や、利根川がこの地を流れていたのではないだろうか。

沖積地と台地の境は、複雑に入りくんでおり、その谷頭（谷田川の自然堤防形成が原因になろうか）には、茂林寺沼、蛇沼等の小池沼や、谷地が多く存在する。

又本地域の特ちょうの一つに、洪積台地西岸にそうように造り上げられた内陸古砂丘の存在があろう。この形成については、まだまだ論議を呼ぶところが多いが、本州最大、日本最古の古砂丘が遠々 10 Ｋ程も続いている。



第1図　館林の現況



第2図　館林の地勢

第2節　歴史的環境

館林における遺跡の存在は、昭和48年の遺跡台帳によるところが大きく、本年度からはじめた分布調査によると、その数は5分の1にもみたないため、本市の特ちょうを明確にしているとはかぎらないが、分布の状況と地形にある程度制限されているように見える。

今回は、分布調査の結果がまとまっていないので、昭和48年時の遺跡分布から、その特ちょうをひろってみたい。

昭和48年時の遺跡分布図を見ると、本市の遺跡数は、46である。

この分布を見ると、遺跡のほとんどが、洪積台地の縁辺部にそうような形で存在する。

又、各池沼や谷地別にグループを形成している状況が観察される。

城沼沿岸部、この沼沿岸には、縄文時代早期～前期の遺跡が多い。又、古墳の分布も多いことが確認される。縄文時代早期～前期の遺跡として、下志柄、花山東、大袋Ⅰ、大袋Ⅱ、三軒屋、屋敷前、善長寺付近の遺跡が上げられる。又古墳としては、町谷古墳、富士山古墳、山王山古墳があり、この他に一の山、二の山の古墳が存在したと伝えられる。

旧矢場川沿岸、本地域には、縄文時代中期～後期・古墳時代のものが多い。縄文時代中期～後期のものは、加法師・外加法師・岡・岡野・朝日町・大街道の遺跡が上げられ、古墳時代の遺跡としては、屋敷添・八方遺跡の存在がある。

茂林寺沼・蛇沼周辺、市内の南東部に位置するこの沼周辺には、縄文時代中期～後晩期のものが多い。弥生以後がないのもこの地域の特ちょうであろう。

近藤沼沿岸、市内の南西部に位置するこの沼周辺では、古墳時代の集落が多い。

近藤障子・伝右衛門・苗木・北近藤第一地点・北近藤第二地点遺跡が、集落遺跡として上げられ、古墳として富士嶽神社古墳がある。又かつて、この地に小規模な群集墳が存在したと伝えられる。

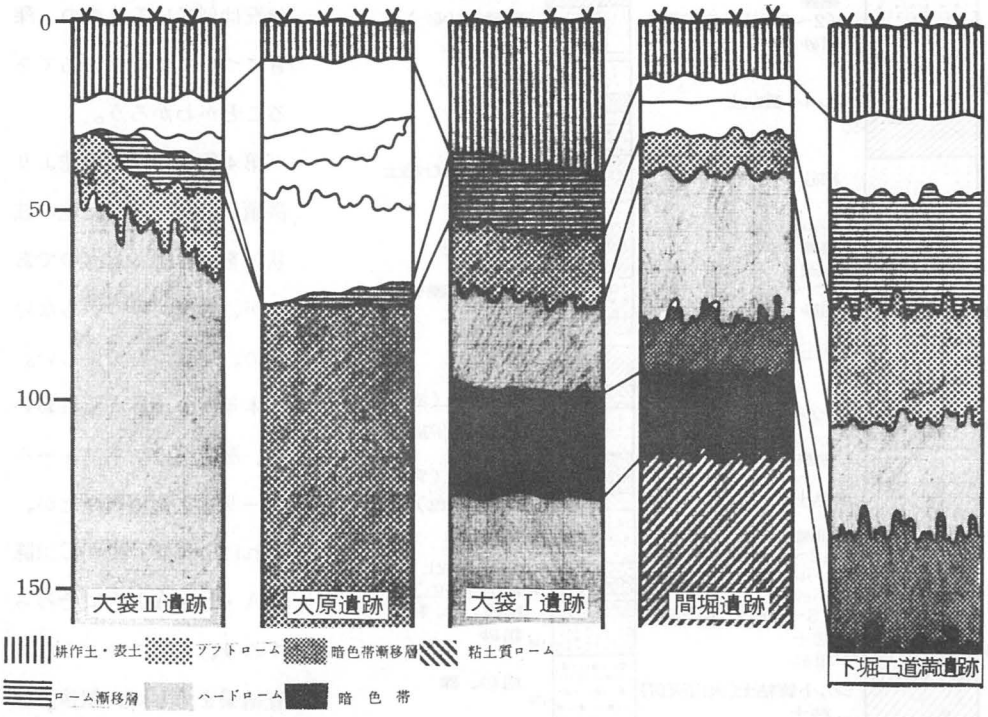
多々良沼沿岸、館林の歴史はここから始まったのではなかろうか？　旧石器時代の遺跡が多い。また、高根古墳群・日向古墳群の存在が伝えられる。

旧石器の遺物を出す遺跡として水溜第一地点・水溜第二地点・上絹屋・山神脇・高根遺跡が上げられる。

以上昭和46年時の台帳をもとに上げてきたが、前述の通り、本年度から分布調査に入っており、この結果がまたれるものである。

第Ⅱ章　館林の土層

ここでは、館林市で、これまで調査された遺跡の柱状図を上げて、比較してみることとする。調査された遺跡は、大袋Ⅱ・大原・大袋Ⅰ・間堀・下堀工道満の各遺跡で、その柱状図を第3図に示した。



第3図　遺跡土層柱状図

館林地方の土層状況の特ちょうを上げるならば、表土から遺物の確認できる層までの厚さが非じょうに薄いということである。

これは、本地域が、土の供給源である火山から遠いせいであろうか、又特有の風と、砂質の土との関係であろうか、台地上の土地改良のせいであろうか、明確にはできないものの、台地上では、20㎝も掘り下げるとローム層にあたってしまう。

このようななかで、人間が残した痕跡と、層序の関係はほとんどとらえることのできないのが現状である。

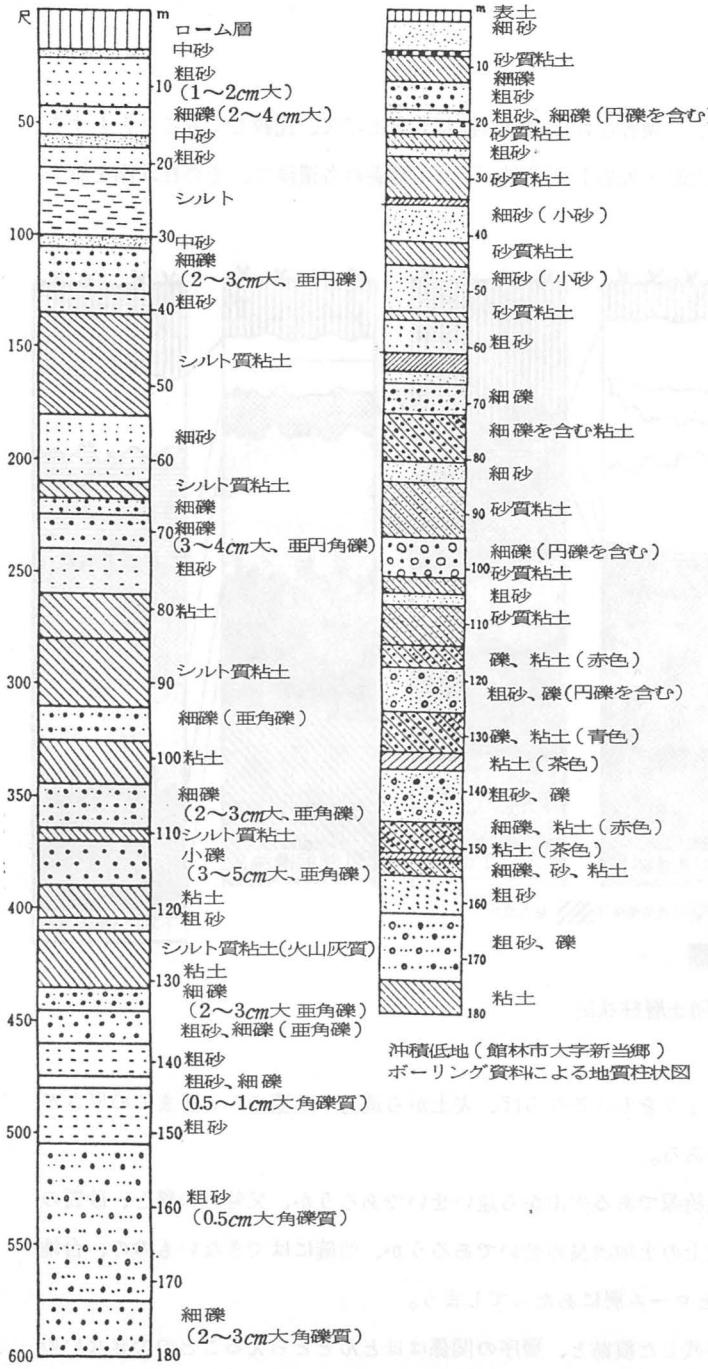
第3図が示すとおり、遺跡間の土層の対比を行うには、表土からの対比ではなく、比較的古い時期の鍵層から考えて行く以外方法はない。

また、館林に共通する柱状図がないことから、発掘調査においても困難を生ずることが多い。

第3図を見ても、わかる通り、台地によって、堆積状況は似ているものの、深さについてはまちまちであることがわかろう。

第4図は、館林史誌より洪積台地及び沖積低地の柱状図をぬき出したものであるが、鍵層がみつからないため、対比がむつかしい。

本年度、茂林寺沼において、湿原部のシンフォールボーリングを実施したが、これによれば、浅間C以降FA・B・Aともにそろっており、今後このような調査結果をもとに、館林の標準土層を考えて行きたい。



第4図　台地及び低地のボーリング柱状図

第Ⅲ章　各遺跡の内容

第Ⅰ節　岡野遺跡

周辺の遺跡

岡野遺跡は、館林市街地の北方、東武伊勢崎線館林駅のおよそ1.5㎞の所に所在する縄文時代の遺跡である。

本遺跡は、館林・邑楽台地の北縁に位置し、比高は現水田面から3mを測る。この台地は、渡良瀬川沖積地にのぞむやや広い台地で、遺跡は、この台地の縁辺部からやや内側に拡がっている。又遺跡下には沖積地が拡がり、旧矢場川の旧河道を確認することができる。

本遺跡は前述した旧矢場川沿岸のグループに入り、周辺の遺跡には、縄文時代中期～後期の遺跡が多い。縄文時代前期～中期の遺物を出すものに、岡遺跡（８）本遺跡（４）、中期～後期の遺物が確認される遺跡として、岡遺跡（８）大街道遺跡（９）朝日町遺跡（10）があげられる。又古墳時代の集落として屋敷添遺跡（５）八方遺跡（６）がある。

近くではあるが、内陸古砂丘上には、外和田遺跡（１）・高根遺跡（２）等の古墳時代の遺跡も確認できる。

調査の経過と内容

本遺跡の発掘調査は、地権者栗原滋氏の館林市大字岡野字大道北560－28における個人専用住宅の建設による。

教育委員会では、同地域における建築確認申請が、市役所建築課に提出された時点で、遺跡のとりあつかいについて、協議を開始するとともに、同地の現地踏査を行った。

踏査により、現地はすでにズリ石があり、隣接地は倉庫・同地は駐車場として利用されていた。

しかしながら、周辺の畑地では、奈良～平安時代の遺物が、多数採取できた。

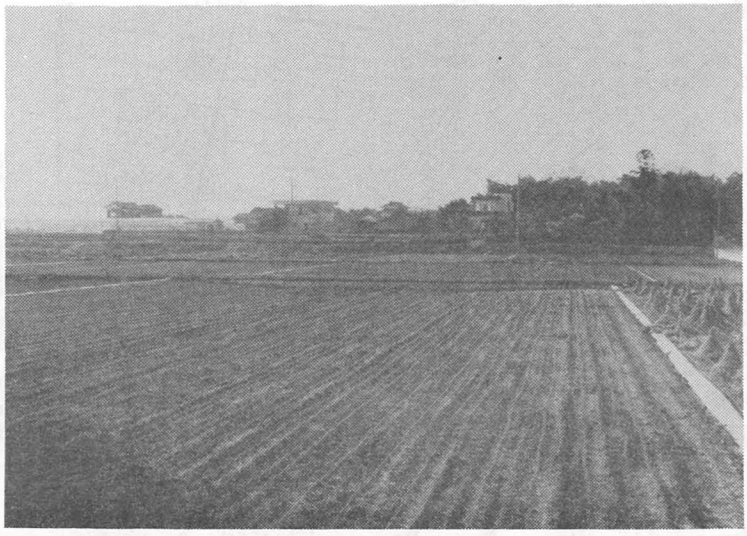
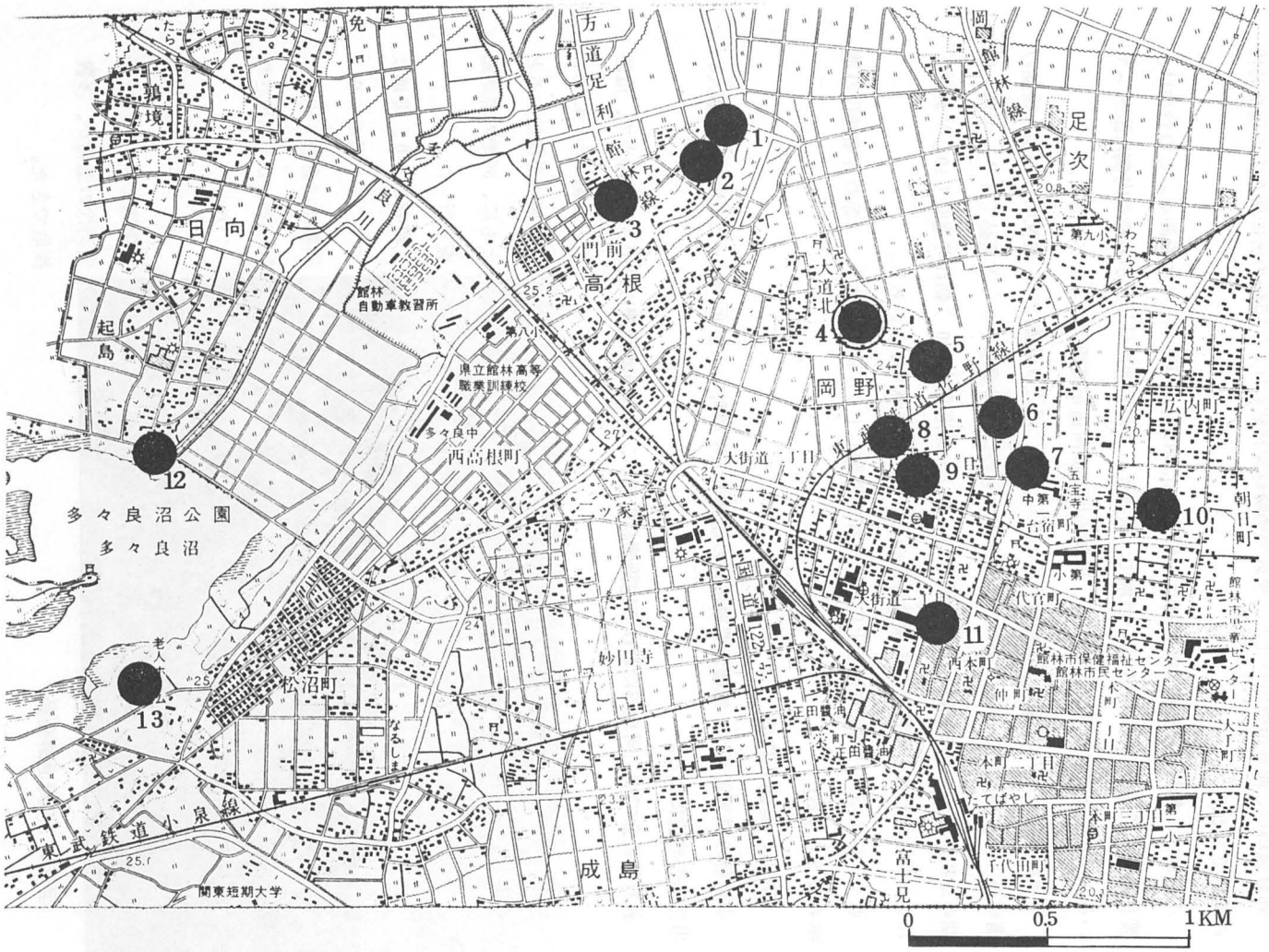
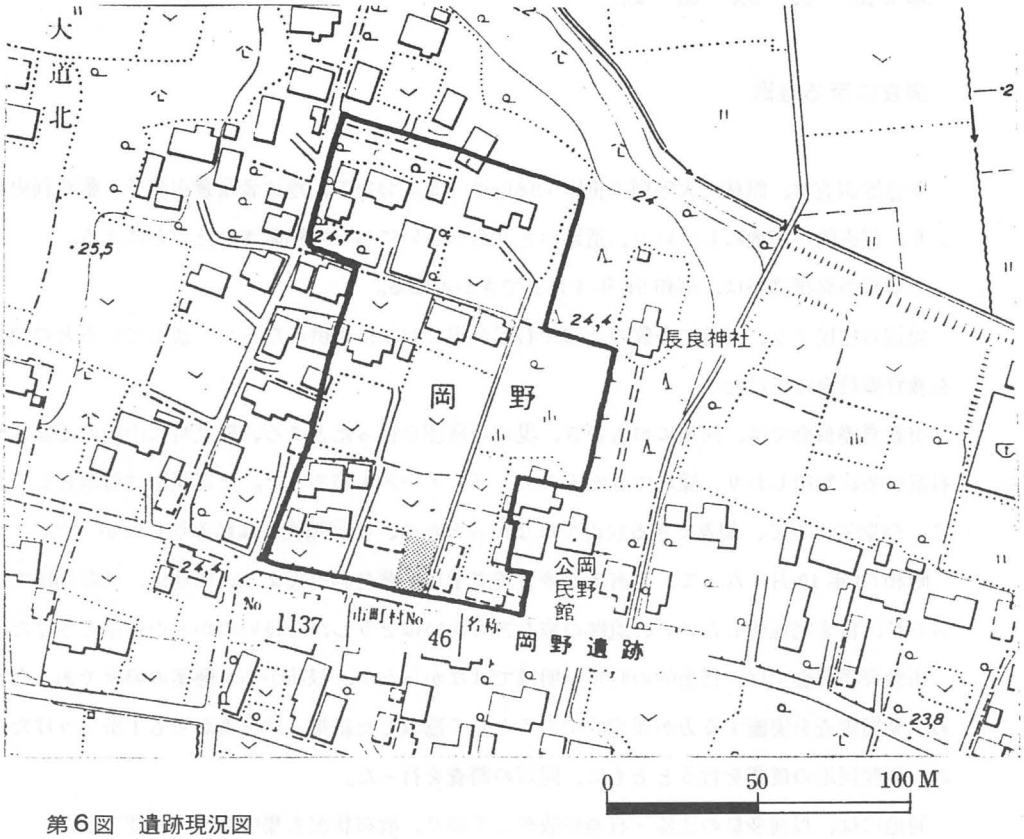


写真６　岡野遺跡全景



1. 外和田遺跡
2. 高根遺跡
3. 山神脇遺跡
4. 岡野遺跡
5. 屋敷添遺跡
6. 八方遺跡
7. 館林城跡総曲輪
8. 岡　遺跡
9. 大街道遺跡
10. 朝日町遺跡
11. 愛宕神社古墳
12. 多々良沼遺跡
13. 上絹屋遺跡

第５図　岡野遺跡周辺の遺跡



第６図　遺跡現況図

このようなことから、地権者の了解をうけ、確認調査を実施することとした。

調査には、ズリ石があることから、かなりの困難を用し、日数もかかったが、トレンチ内から遺物は採取できたものの、遺構は確認できなかった。

このような経過から、同地には、遺構の存在がないか、もしくは、整地の際に失われているものと判断された。

第Ⅱ節　笹　原　遺　跡

調査に至る経過

本発掘調査は、館林市大字堀工笹原1880−2. 15において、地権者藤倉恵美子・藤倉利史氏より、将来的に宅地にしたいが、遺跡のとりあつかいについて協議されたことによる。

本地域の発掘調査は、昭和58年4月までさかのぼる。

周辺の住民より、同地に多数の土器や石器が出ており、子供がひろって遊んでいるとの通報を教育委員会に受けた。

市教育委員会では、同地におもむき、現地の確認を行ったところ、縄文時代中期の土器片や石器が多数散布しおり、採取できたもので、パンケース1箱あった。ただ現地は農地として有り、時期的にみて、調査できる状況ではなかったため、発掘調査には踏み切れなかった。

昭和58年10月になって、所有者の藤倉美恵子氏、藤倉利史氏より、同地は、現在畑地ではあるが、将来宅地化したいが、遺跡の取りあつかいはどうしたら良いのかとの連絡をうけた。

市教育委員会では、将来的の時期が明確ではなかったが、以前からも懸案の場所であったため、発掘調査を実施する方が理想的であるとして協議した結果、地権者からも了解をうけたため、再度同地の確認を行うとともに、同辺の踏査を行った。

同地には、以前多量の土器・石器が散布しており、散布状況も集中箇所が確認できた。

以上のような理由から、12月より調査を実施することとした。

同地踏査の結果、前述の通り、遺物の集中する箇所が3ヶ所あることから、住居址等の遺構の存在が考えられた。

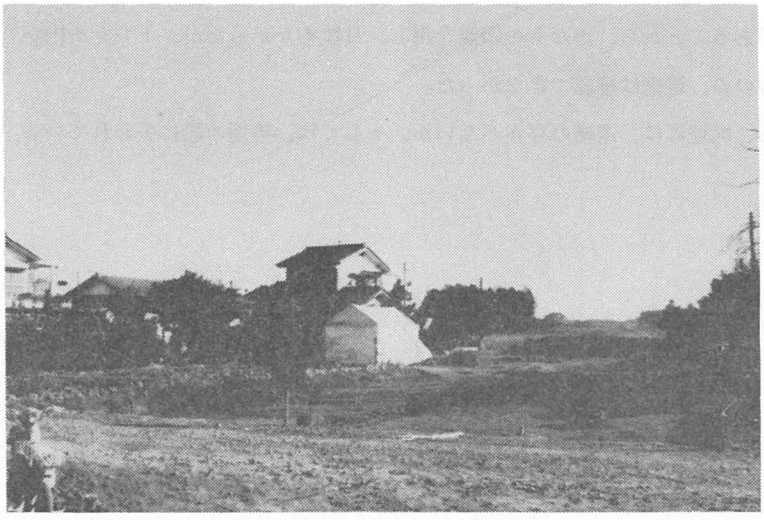
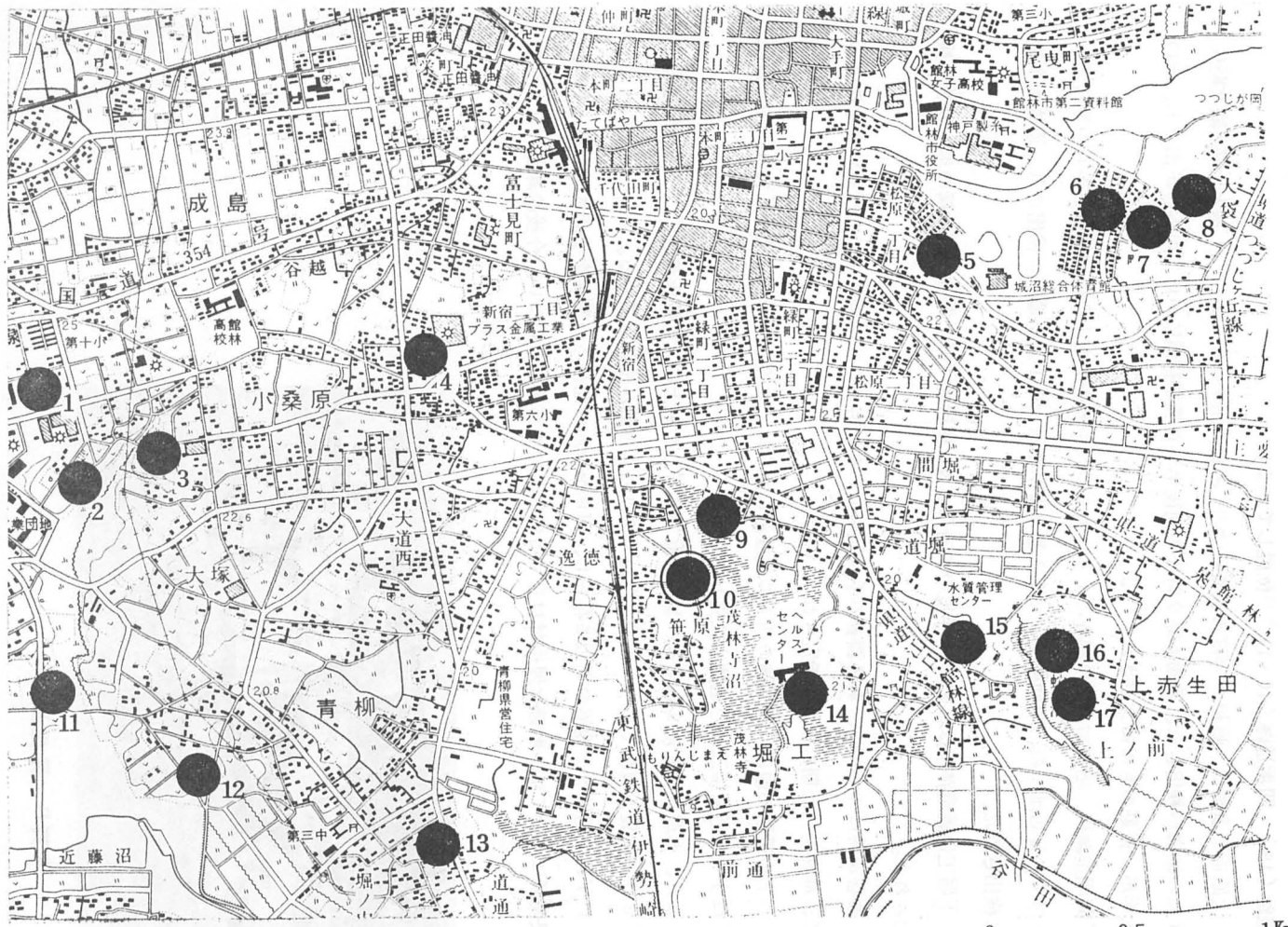


写真7　笹原遺跡全景



1. 近藤障子遺跡
2. 伝右衛門遺跡
3. 北小袋遺跡
4. 富士嶽神社古墳
5. 屋敷添遺跡
6. 三軒屋遺跡
7. 大袋Ⅱ遺跡
8. 大袋Ⅰ遺跡
9. 腰巻遺跡
10. 笹原遺跡
11. 北近藤第一地点遺跡
12. 苗木遺跡
13. 青柳城跡
14. 下堀工道満遺跡
15. 大原道東遺跡
16. 17. 間堀遺跡

第7図　笹原遺跡周辺の遺跡

周辺の遺跡

笹原遺跡は、館林南部・東武伊勢崎線茂林寺駅前の北東約500mに所在する。

遺跡の東方に、茂林寺沼上流域の谷地が開がり、この谷地を挟んで、北東に腰巻遺跡（９）南東に下堀工道満遺跡（14）が位置する。さらに東方約１Kmには蛇沼を中心として、大原道東遺跡（15）・間堀遺跡（16・17）が位置している。

大原道東遺跡は、昭和56年度の調査により、溝状の遺構（中～近世）１基と土坑（縄文時代）３基の遺構が検出され、遺物も縄文時代中期後半から晩期初頭にかけてのものが出土し、その大半が、後期のものに比定されている。

間堀遺跡は、昭和57年度の調査により、縄文時代中期中葉を中心に前期中葉から中期後葉にかけての住居址７軒、中期後半の土坑２基および集石土坑１基の遺構が検出され、遺物も多量に検出された。

下堀工道満遺跡では、昭和58年度の調査により、住居址１軒と堀立て柱遺構の他、遺物も検出された。

腰巻遺跡については、本格調査の手は入っていないものの、踏査による表採資料などによって、縄文時代前期の遺跡に指定されている。

以上の遺跡の他に、本遺跡の西方の近藤沼の北岸に、北近藤第一地点遺跡（11）、苗木遺跡（12）・北近藤第二地点遺跡も位置している。

また、本遺跡の北東２Kmには、城沼を北方に望む台地上に、屋敷添遺跡（５）・三軒屋遺跡（６）・大袋Ⅱ遺跡（７）・大袋Ⅰ遺跡（８）の各遺跡が位置している。

いずれの遺跡も、池沼の周辺に存在し、何らかの形で池沼との関係を予想させるが、その因果関係については、明確な理由付けをするには、いまだ至っていない。今後の課題のひとつである。

写真８　発掘風景

遺跡の内容

前述のように、当調査区域において、多数の石鏃の分布が確認された。また、表土（耕作土）がうすく、ローム粒子の混在もみられた。

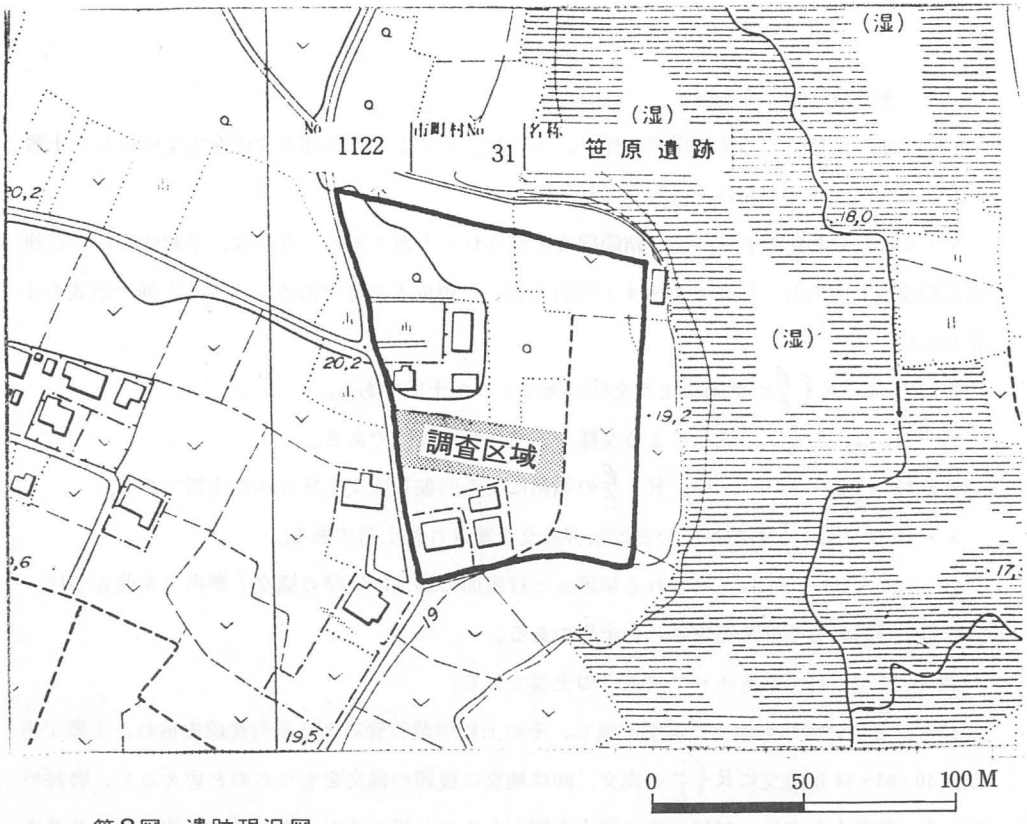
以上の理由から、既に遺構等も破壊されており、その確認には困難が予想された。そこで、調査は、耕作物のある、調査区域北西の一部を除く全面を調査する方法を取ることにした。

上述の調査区に、　辺3mのメッシュをかけ、南から北へA～E列、西から東へ1～12列の41のグリッドを設定し、丁寧に表土を剝ぎながら、遺構の検出に努力した。

表土（耕作土）に、ローム粒子が混在していることは、先に述べたことであるが、締りも無く、ローム層への漸移層にかけて、砂質の粒子の混入も著しく、折からの風により、遺構の平面プランでの確認は、困難を極めた。

そこで、C列グリッド杭の北側に、幅50㎝のトレンチを設定し、土層断面による、遺構の確認も平行して行なうこととした。

当初、当調査区を載せる台地は、東方の谷地へ向かって、かなりの傾斜で落ち込んでいるも



第8図　遺跡現況図

のと思われていたが、土層断面の状態は、2グリッド杭から12グリッド杭までの30mの水平方向に対して、20㎝程度の傾斜を示すことが判った。

また、台地の中央部から下方にかけて随所で、樹木の根によるものと思われる、広範な攪乱が見られた。地元の老人の話では、かつて桃畑があったとのことで、この桃樹による攪乱と思われる。

B－5G～B－10Gは、日陰であったため、約30㎝程度土壌が凍結し、作業員を悩ました。遺物の出土数も少なくなり、かつ遺構も確認できないことから、以上のグリッドについては、第Ⅱ層の途中で、また12グリッド以下については、攪乱がそのほとんどを占めることと、排土置場の関係から、調査を断念することとした。

遺物の出土は、台地上方には少なく、下方で多いものの、顕著な集中は見られなかった。出土遺物の特徴としては、石鏃の出土数に驚ろかされる。土器はそのほとんどが、破片であり、実測可能なまでに、復元された土器は、3個体のみであった。出土層位は、第Ⅰ層中がほとんどであり、攪乱中からも、かなりの数の遺物が出た。

出　土　遺　物　（土器）

1～4は、半載竹管の連続爪形文様と、へら状工具による、引描き文様を主文様とした土器である。2・3は、細かい沈線も見られる。

5・6は、L{r/r}の燃糸による結節縄文を施された土器である。5には、半載竹管による連続爪形文様も見られ、胎土も1～4と同質で細く、焼成も良好である。1～4と同一形式の土器である。

7・14は、R{ℓ/ℓ}の燃糸による文様の施文された土器である。

10～12は、L{r/r}の燃糸による文様の施文された土器である。

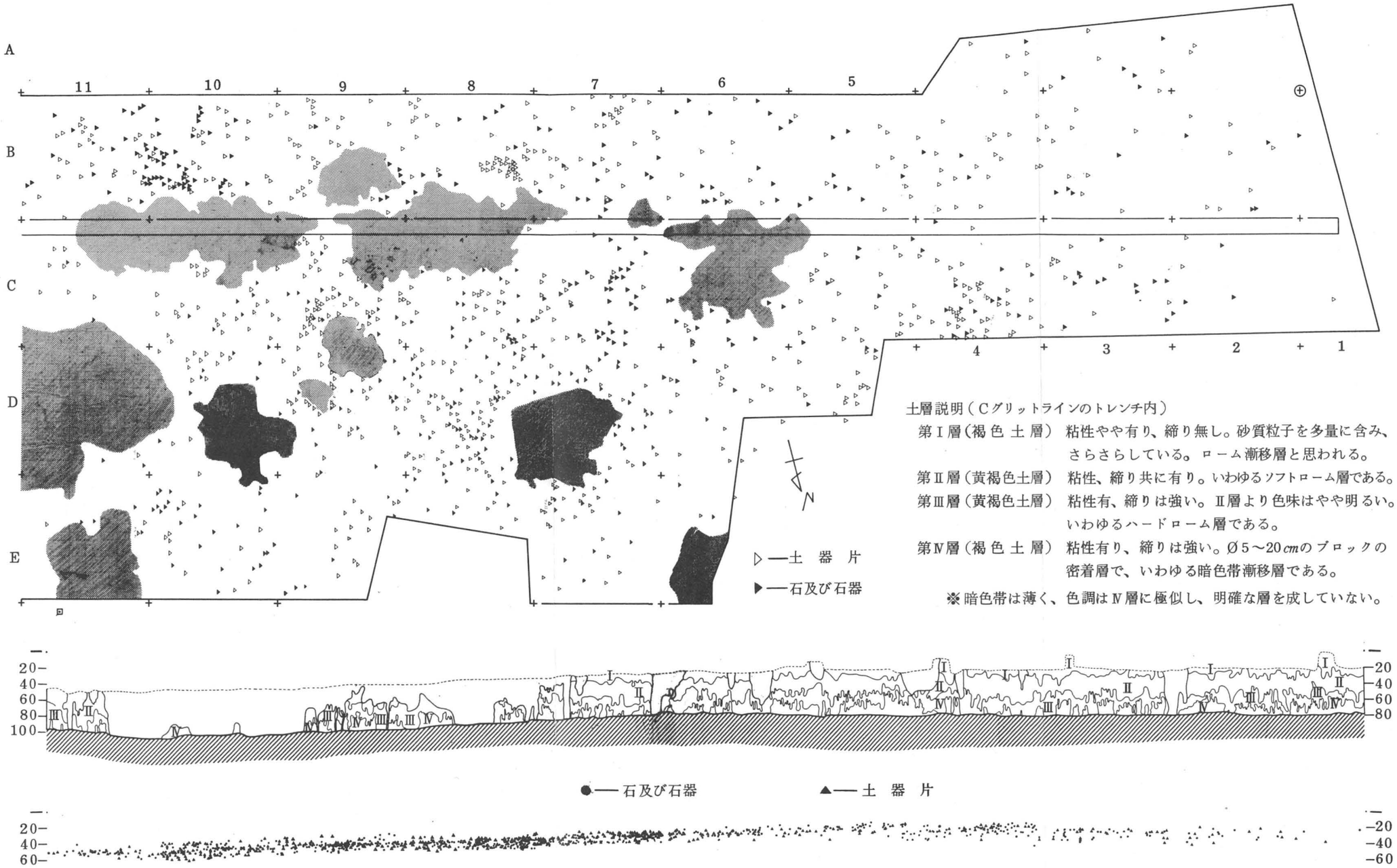
8・13・15・17～21は、R{ℓ/ℓ}の燃糸による回転押捺文を施された土器である。

9・16は、L{r/r}の燃糸による回転押捺文を施された土器である。

22～24・26～41は、いずれも単節または複節の縄文に無節の縄文（燃糸）を曲きつけ、回転して得られる文様を施文された土器である。

42～48は、いずれもループ文をもつ土器である。

49～56は、いずれも地文に縄文を施し、その上に半載竹管による平行沈線を重ねた土器である。49・51・54は地文にR{L/L}の縄文、50は地文に複節の縄文をもつものと思えるが、磨耗が激しく、判然としない。52は地文に縄文を施したものと思えるが、すべて平行沈線により消さ



土層説明（Cグリットラインのトレンチ内）

第Ⅰ層（褐色土層）　粘性やや有り、締り無し。砂質粒子を多量に含み、さらさらしている。ローム漸移層と思われる。

第Ⅱ層（黄褐色土層）　粘性、締り共に有り。いわゆるソフトローム層である。

第Ⅲ層（黄褐色土層）　粘性有、締りは強い。Ⅱ層より色味はやや明るい。いわゆるハードローム層である。

第Ⅳ層（褐色土層）　粘性有り、締りは強い。Ø5～20cmのブロックの密着層で、いわゆる暗色帯漸移層である。

※暗色帯は薄く、色調はⅣ層に極似し、明確な層を成していない。

第9図　遺物分布及び調査区全体図

れている。胎土・焼成等から、このグループに入れた。53・55・56は地文の縄文が磨耗していて不明であるが、やはりこのグループの土器である。

57～68・70・71は、いずれも斜縄文を施された土器である。57・61・64～66はL{R/R}の縄文を、58～60・62・63・70はR{L/L}の縄文を、67・68は磨耗していて、判然としないがR{R/R}、もしくはL{L/L}の縄文により、施文されている。

71は、口縁破片7片による復元個体の実測図である。（口縁円周の$\frac{1}{4}$程度の現存である。）

口縁から大きく内彎し、ゆるやかに胴部へ向かう。L{R/R}の斜縄文を施す。色調は灰色を帯びた淡い褐色で、焼成は良好である。深鉢であろう。

72～77は、胎土に金雲母を含み、焼成は良好である。色調は褐色である。72は、口縁の破片であり、降帯を貼り付け、へら状工具により、キャタピラ状の文様を施してある。73・74も、口縁破片であり、隆帯の貼り付けは認められないが、キャタピラ状の文様を施してある。75は、波状の口縁に、隆帯を大きく突起させて貼り付け、キャタピラ状に文様を施してある。

78は、口縁破片8片による復元個体の実測図である。（口縁円周の$\frac{1}{4}$程度の現存である。）

口縁からゆるく彎曲し、胴部へ向かう。無文であるが、へらによりきれいに磨き調整されている。裏面も、表面に比べ少々難であるが、やはりヘラにより調整されている。色調は灰色を帯びた淡い褐色で、胎土にΦ1㎜程度の荒砂を混在し、Φ3～6㎜の小石も点在。焼成は良である。深鉢であろう。

80の現存部は、口縁から8㎝下方までであるが、キャリパー状の深鉢であると思われる。現存部からの推定によると、口径約13㎝、器高18～20㎝程度であろう。

口縁は、隆帯の貼り付けによる二重に縁を呈し、大きく内彎し、ゆるやかに外彎し底部へ向かう。焼成は良で、色調は赤褐色、胎土はΦ0.3～2㎜程度の荒砂を混在し、均一である。

口縁に付された文様帯を載せる隆帯は太く、小さなうず巻きを形成しながら、口縁を区画している。区画の形はゆるいカーブを描く半月形で、その中にL{R/R}の斜縄文を施す。胴部にはR{L/L}の斜縄文を施す。79と共に、加曽利E式に指定できよう。

81は、口縁の破片であるがR{レ/レ}の斜縄文を地文とし（一部にレ{R/R}も見られる。）、V字状の隆帯を貼り付ける。口唇に近い部分には、刺突文も見られる。

83～85は、U字の沈線を大きな波状に施した土器である。胎土は均一で、荒砂を含み、焼成は良好である。称名寺式に指定できよう。

86～92は、いずれも、縄文時代の遺物ではない。

86は、高台付底部の破片である。胎土は細かく均一で、焼成は良好である。色調は灰色を帯びた淡い褐色である。

87は、須恵器の破片であるが、器形等は不明である。タタキ目が施してある。

88は、土師質の土器であるが、卍くずしのプリント文様及び円形のプリント文様が施してある。

89も、土師質の土器であるが、格子状の文様が、きれいに施されてある。時代的には、新しい遺物であろう。

90も、土師質の土器で、平行に沈線を施す。

91は、磨り鉢の破片ではないかと思われる。焼成も良好で、細かい沈線も磨耗していない。時代的には、新しい遺物であろう。

92は、高台付きの底部として、拓本、実測したが、器形等については、不明である。焼成も良好で、文様もしっかりと残っている。近代以降の遺物であろう。

以上で、土器の説明を終えるが、破片がほとんどであったため、まとまった説明ができなかった。

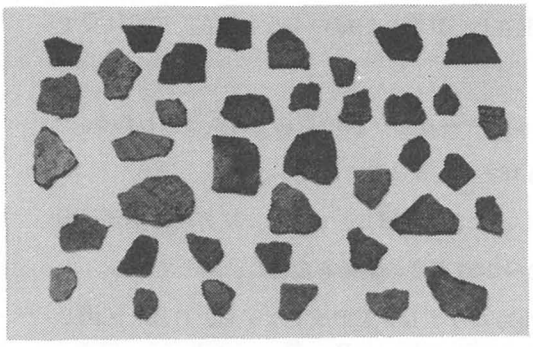


写真9　土　器　(1)

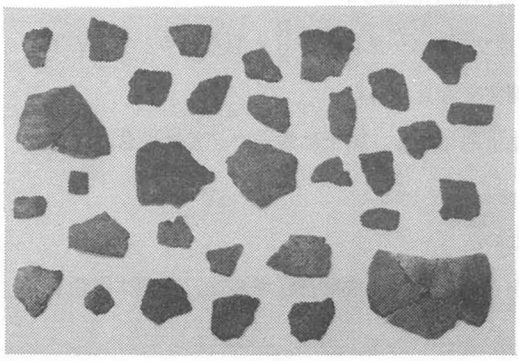


写真10　土　器　(2)

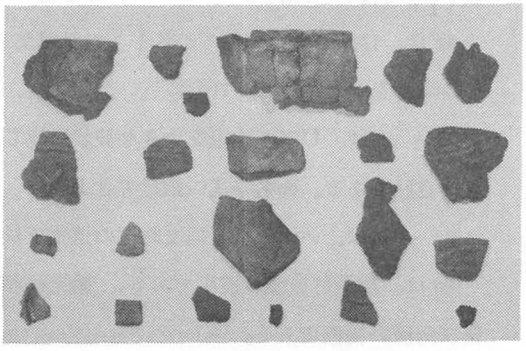
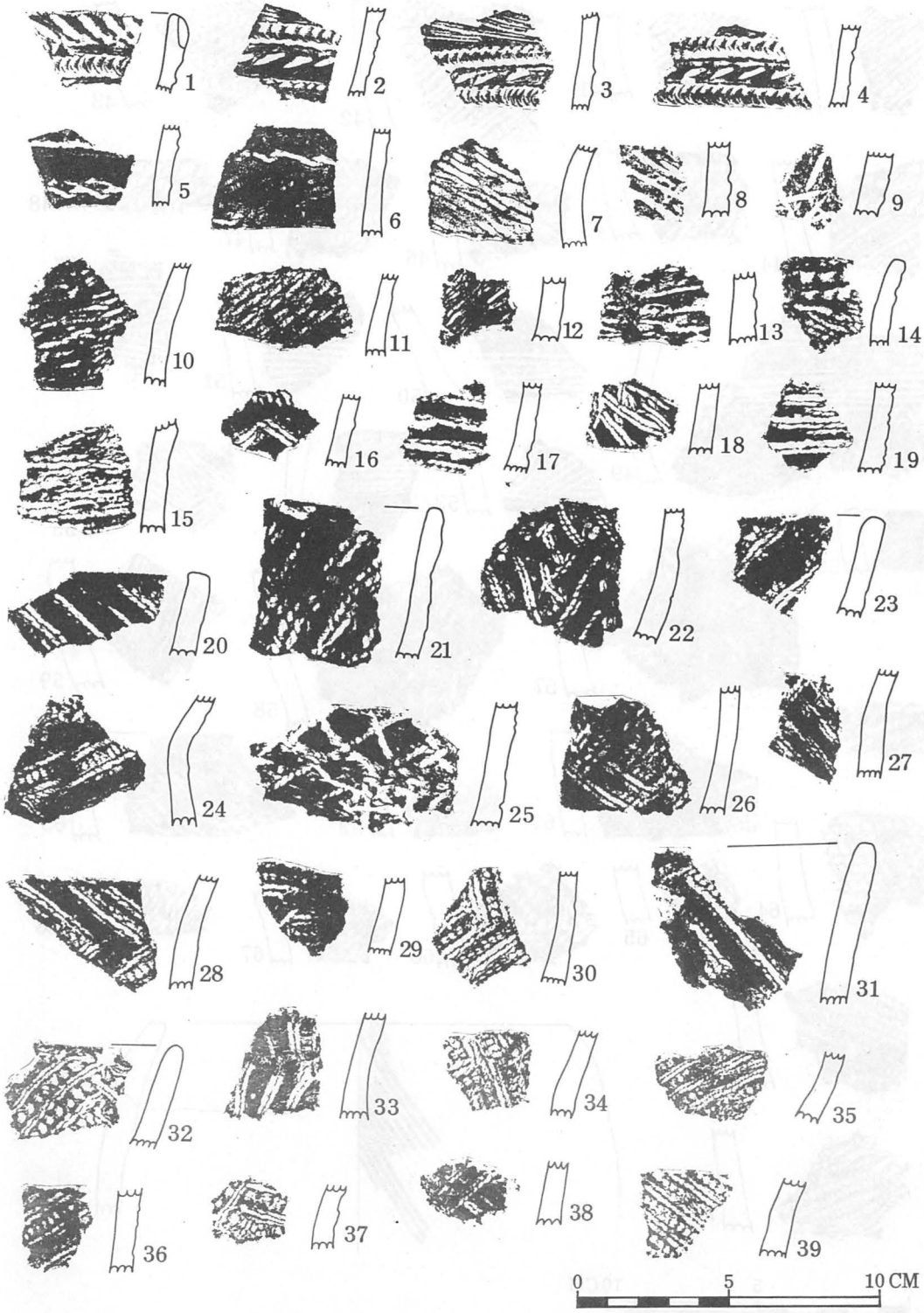
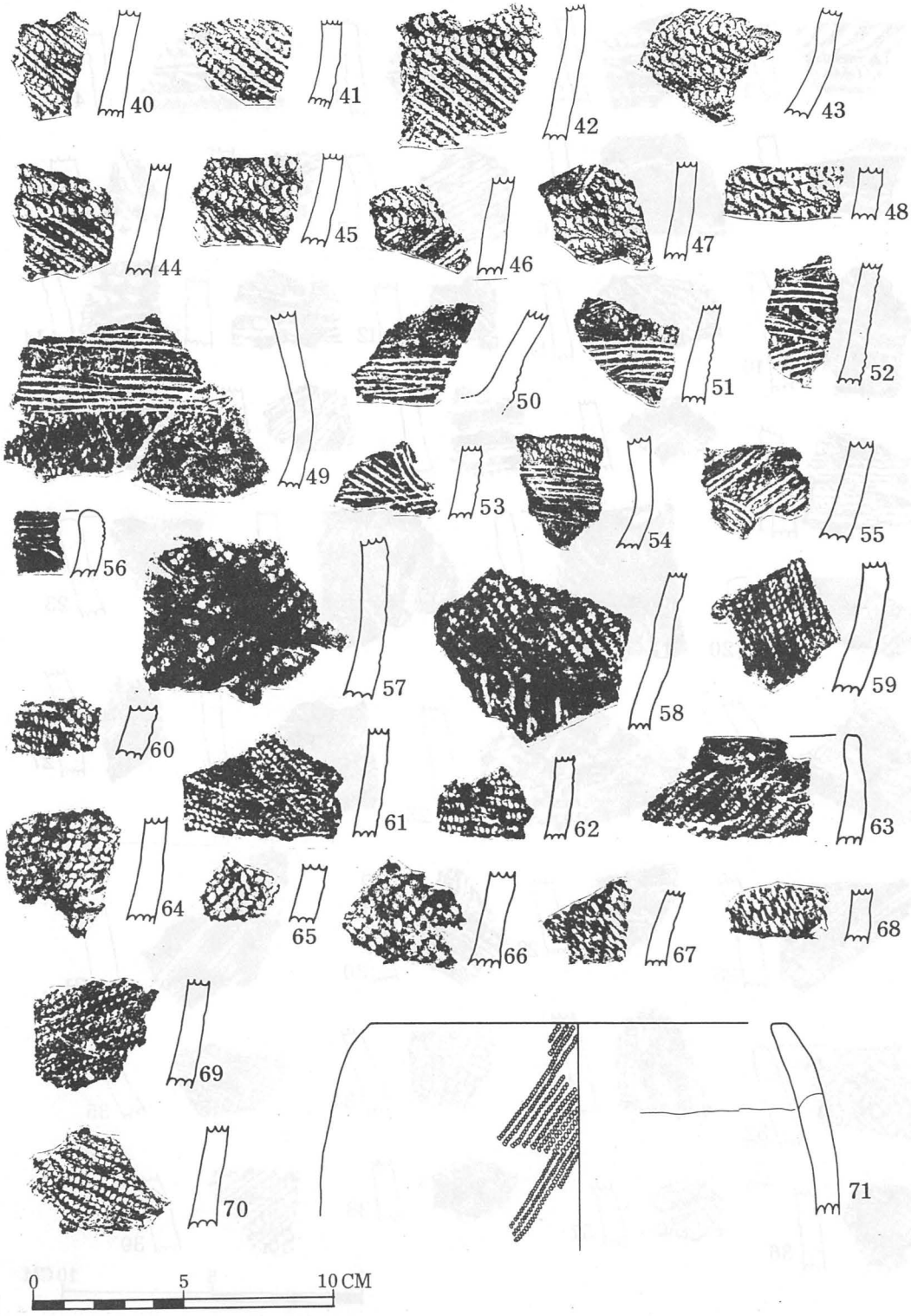


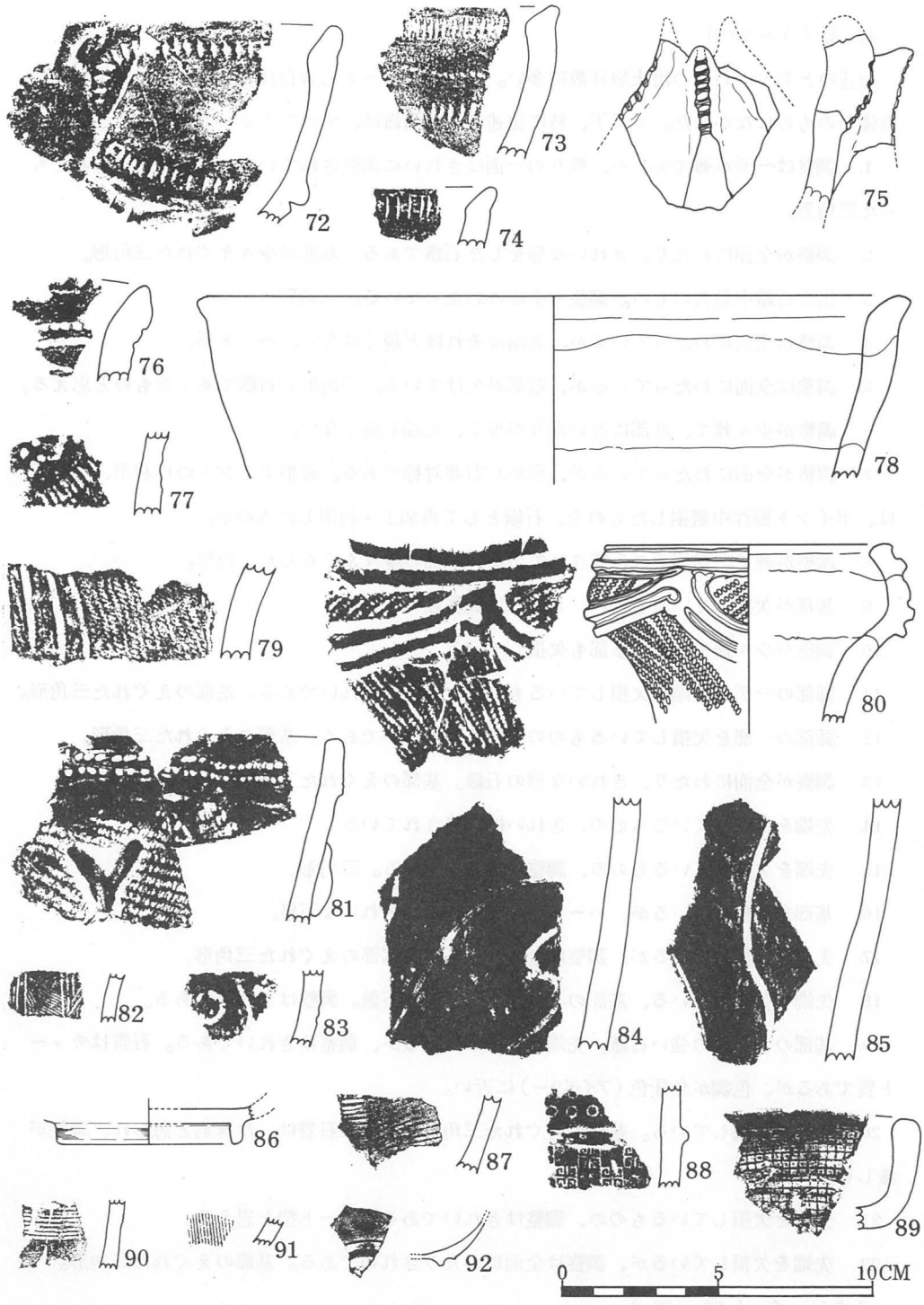
写真11　土　器　(3)



第１０図　土器拓影及び実測図 (1)



第１１図　土器拓影及び実測図(2)



第12図　土器拓影及び実測図(3)

出 土 遺 物 （石器）

石　鏃（1～22）

前述のとおり、石鏃の出土個体数は多い。石質はチャート（青白珪石）のものが大半であり、黒曜石のものはなかった。（以下、特に記述のない石鏃は、すべてチャート製である。）

1. 調整は一面が雑であるが、残りの一面はきれいに調整されている。基部にふくらみをもった三角形。

2. 調整が全面にわたり、きれいな形をした石鏃である。基部が少々えぐれた三角形。

3. 出土石鏃中最大のもの。調整も全面にわたっている。三角形。

4. 調整は全面にわたっているが、先端はそれほど鋭くはない。ハート形。

5. 調整は全面にわたっているが、基部が欠けている。三角形の石鏃であったものと思える。

6. 調整が少々雑で、基部に近い部分が厚く、先端も鋭くない。

7. 調整が全面にわたっているが、形が左右非対称である。破損ポイントの再利用、もしくは、ポイント製作中破損したものを、石鏃として再加工・利用したものか。

8. 調整が雑で、周辺部のみ施されている。基部の少々ふくらんだ三角形。

9. 基部が欠損しているものの、きれいに調整されている。

10. 調整が少々雑であり、基部も欠損している。

11. 脚部の一部と先端を欠損しているものの、調整はきれいである。基部のえぐれた三角形。

12. 脚部の一部を欠損しているものの、調整はきれいである。基部のえぐれた三角形。

13. 調整が全面にわたり、きれいな形の石鏃。基部のえぐれた三角形。

14. 先端を欠損しているものの、きれいに調整されている。

15. 先端を欠損しているものの、調整はきれいである。三角形。

16. 基部を欠損しているが、ハート型と思われる、きれいな石鏃。

17. 先端を欠損しているが、調整はきれいである。基部のえぐれた三角形。

18. 先端を欠損している、基部のえぐれた三角形の石鏃。調整はきれいである。

19. 基部のえぐれの強い石鏃。先端を欠損しているが、調整はきれいである。石質はチャート質であるが、色調が象牙色（アイボリー）に近い。

20. 先端を欠損している。基部のえぐれた三角形の石鏃。石質は、片麻岩と思われ、磨耗が激しい。

21. 先端を欠損しているものの、調整はきれいである。ハート型と思える。

22. 先端を欠損しているが、調整は全面にわたりきれいである。基部のえぐれた三角形。

スクレーパー（23～28）

23～28は、すべてチャート製のスクレーパーである。調整は、23・25を除き、比較的大まか

である。24は、ここでは、スクレーパーとして分類したが、石錐であったものの、再利用とも考えられる。27は、エンドスクレーパー。

石　錐（29～32）

29～32は、いずれも石錐であるが、錐の部分は欠なわれている。29・30・32は、支持部が丸みを帯びており、調整もきれいに施されている。31は、支持部が厚く三角形であり、これも調整が行きとどいており、支持しやすい形と成っている。いずれもチャート製。

33は、チャート製のナイフ型石器である。石核から、縦長にフレークをとり、大まかな調整を施したものであるが、刃部は、かなり鋭利である。

34も、ナイフ型の石器であるが、細かい粒子で成った泥岩質の素材で作られており、それほど鋭利ではない。

35は、打製石斧であり、砂岩の片平な礫に大まかな調整を施したものである。

36・38は、いずれもチャート製のナイフ型石器で、大まかな調整であるが、鋭利である。

37は、砂岩の片平な礫に調整を施した石器であるが、その大半を欠損しており、用途等については不明である。一面は、平らに磨られている。

39は頁岩製、40は砂岩製の、いずれも石錘である。片平な礫の両端を欠き石錘としたものである。

41は、白色の石（石質はヒスイか？）の小型の勾玉状の遺物である。表面は、よく磨かれており、くびれの部分に、穴を穿ったと思われる痕跡がある。用途・時代等については、不明である。

42は、ガラス質の片平な遺物で、表面は磨耗している。内部に気泡が入っているが、その入り方から、黒曜石等の自然ガラスではないものと思われる。用途・時代等については、不明である。ガラス平玉か。

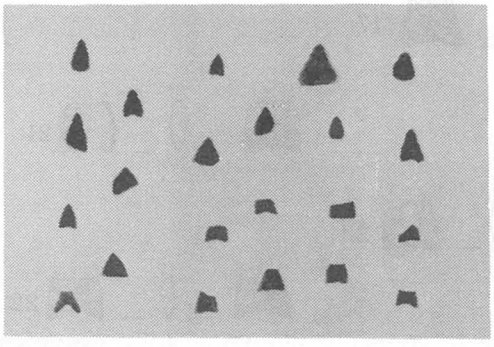


写真12　石　器（1）

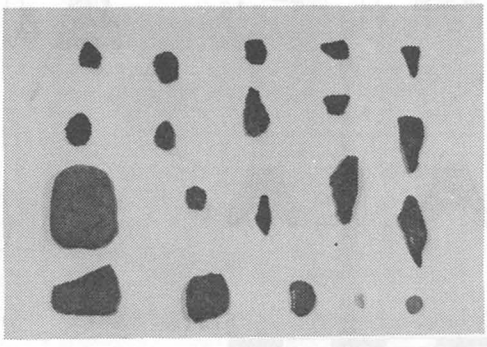
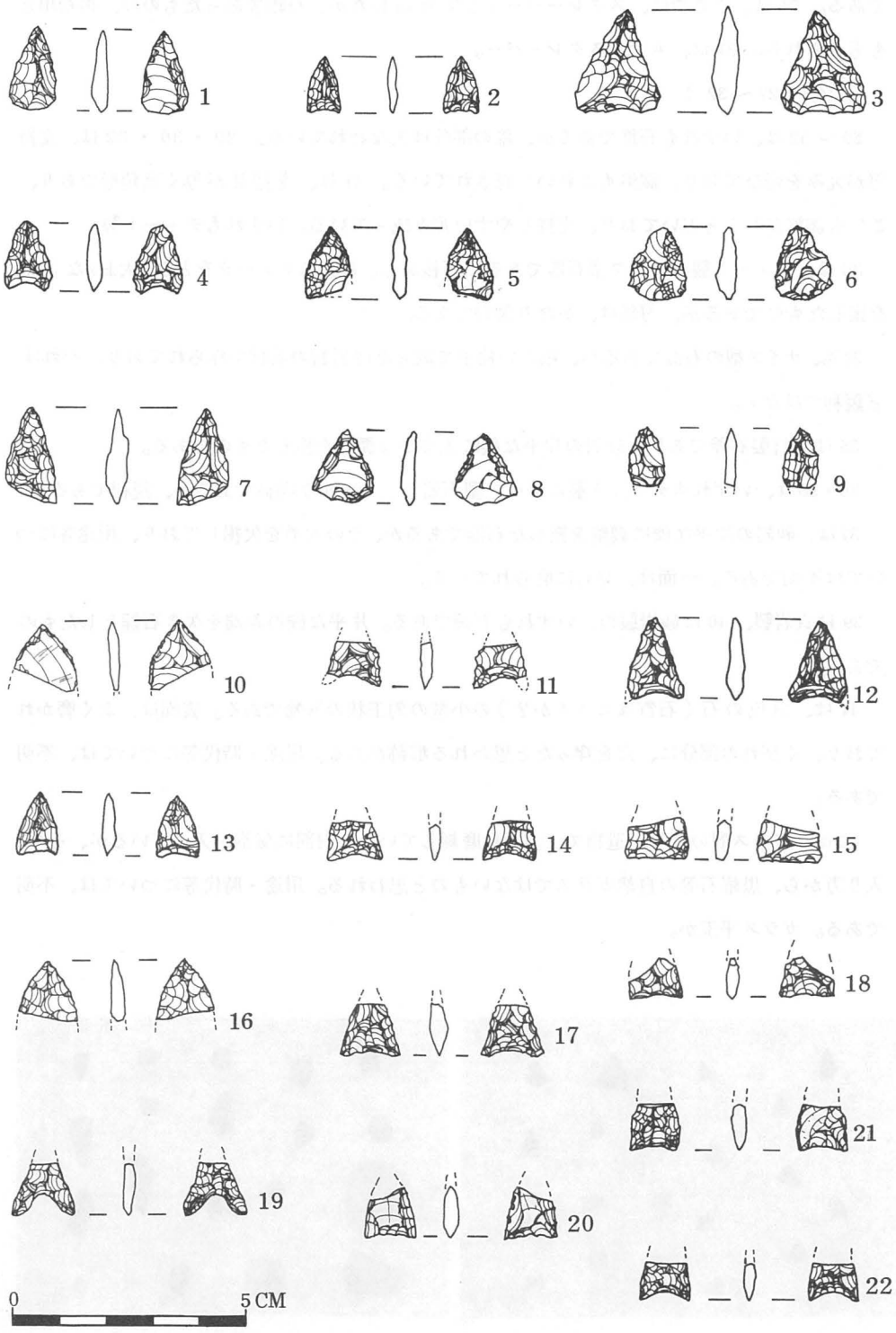
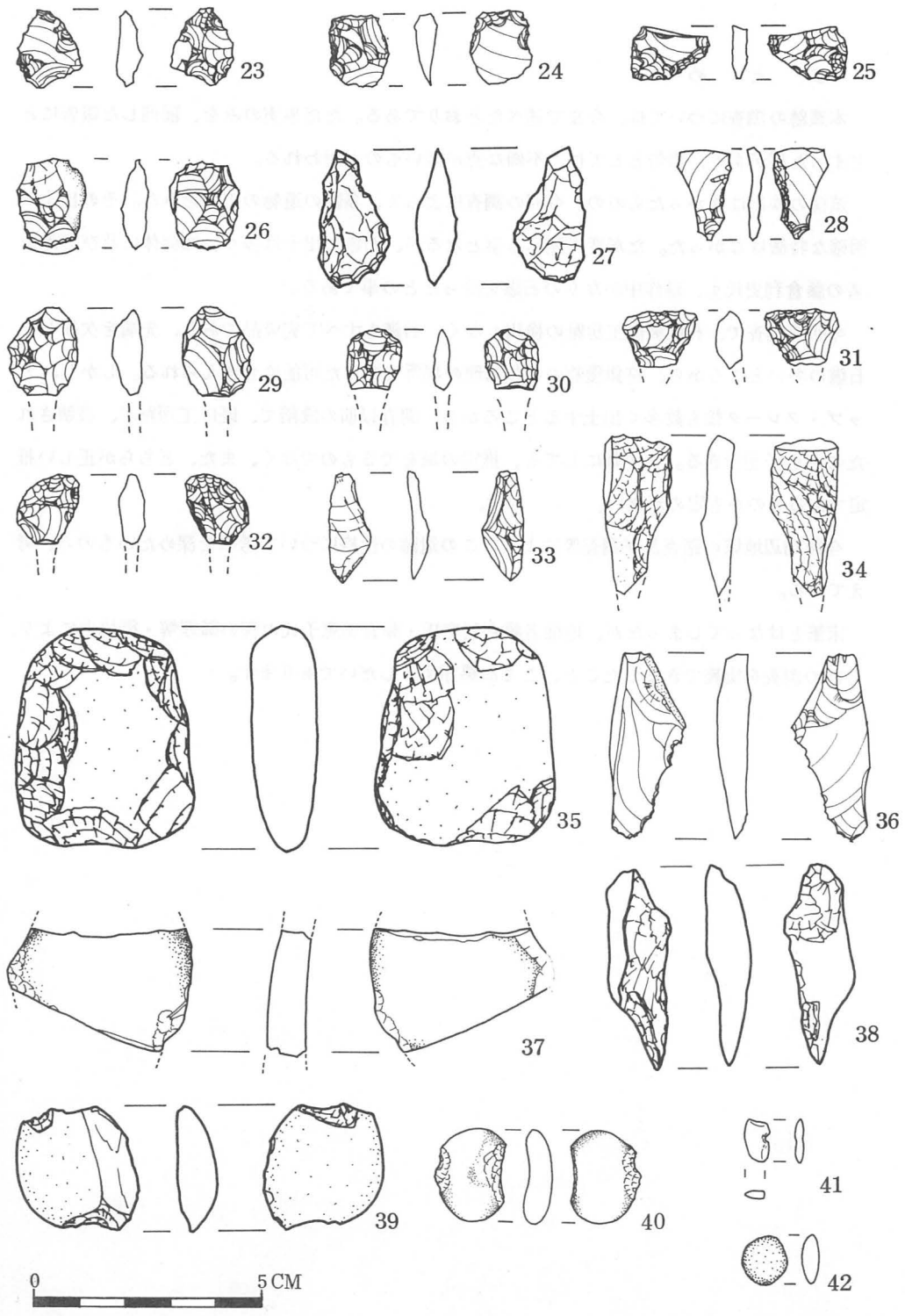


写真13　石　器（2）



第１３図　石器実測図 (1)



第１４図　石器実測図（2）

ま　と　め

本遺跡の調査については、今まで述べたとおりである。ただ事実のみを、羅列した報告にとどまった感があり、報告としては、不備な点が多いものと思われる。

遺構の検出はなかったものの、今回の調査によって、多数の遺物の出土をみた。その出土に明確な特徴はなかった。ただ度々述べる事となるが、石鏃の出土は多く、22個体に及び、地権者の藤倉利史氏も、耕作中かなりの石鏃を拾ったとの事である。

今回の調査で、石鏃製作工房趾の検出もなく、石鏃もすべて完成品であり、先端を欠損した石鏃の多いところから、狩猟獲物の解体処理の場所であった可能性も考えられる。しかし、チップ・フレーク類も数多く出土するところから、調査以前の段階で、既に工房趾が、破壊されたことも予想できる。いずれにしても、推定の域をでるものでなく、また、どちらが正しい推定であるものかも定めがたい。

今後周辺地域の踏査及び調査等により、この遺跡の性格について考察を深めたいものと、考えている。

末筆とはなってしまったが、地権者藤倉利史氏・藤倉美恵子氏の深い御理解・御協力により、今回の調査を実施できましたこと、ここに感謝するしだいであります。

第Ⅳ章　その他の発掘調査

最後に、本年度実施した個人開発に伴う現地立ち合い調査について一覧表で上げたい。

本年度は、「あかぎ国体」の実施年度であったため、これを反映してか、個人宅造等の建設は相対的にみて数が少ない。

このため、これと対応してでてくる現地立ち合い調査事体数が少なかったといえる。本年度実施したものは、発掘調査（前述）も含めて、１２件である。

ただ、やはり「国体」終了後、数の増加がみられるのは、前記理由が反映しているものと考えられる。

一覧において、①年月日、②住所、③原因、④状況、⑤備考である。

①６月～７月②館林市岡野大道北560－28③個人宅造④確認調査実施・遺構なし⑤岡野遺跡内

①９月１日②館林市松原１－19－28③個人宅造④根切り立ち合い・すでに整地⑤屋敷添遺跡周辺

①10月20日②館林市近藤障子178－137，931③個人宅造④根切り立ち合い、遺構なし⑤近藤障子遺跡周辺

①10月20日②館林市近藤障子178－932　③個人宅造④根切り立ち合い、遺構なし⑤近藤障子遺跡周辺

①10月20日②館林市近藤障子178－935　③個人宅造④根切り立ち合い、遺構なし⑤近藤障子遺跡周辺

①10月30日②館林市青柳北近藤③個人宅造④根切り立ち合い、すでに整地⑤北近藤第一地点遺跡周辺

①11月10日②館林市羽附3086－20　③個人宅造④根切り立ち合い、すでに整地⑤大袋Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺

①11月15日②館林市美園町506－10，11③社員住宅建設④根切り立ち合い⑤腰巻遺跡内

①12月１日②館林市高根寺内33－7③個人宅造④根切り立ち合い、すでに整地　⑤外和田遺跡周辺

①12月～１月②館林市堀工笹原1880－2，15③個人宅造④発掘調査⑤笹原遺跡内

①３月10日②館林市成島子々ケ崎1271③倉庫建設④根切り立合い、すでに整地⑤水溜第二地点遺跡周辺

①３月20日②館林市岡野南164③個人宅造④根切り立ち合い、遺構なし⑤岡遺跡周辺

以上の通りである。

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集

館　林　市　内　遺　跡

発　掘　調　査　報　告

発　行　　館　林　市　教　育　委　員　会

印　刷　　オ　ー　ラ　印　刷　有　限　会　社

発行日　　昭　和　５９　年　３　月　３１　日

文化財愛護シンボルマーク

ふるさとの文化と歴史を見なおそう